

死をどうしたら受けとめられるのか⑦

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

アルフォンス・デーケン氏によって提唱された「死への準備教育」は、死をタブー視せず、死について語ることが重要であることを指摘しました。彼は、昨年、15年ぶりに『死とどう向き合うか』を新版として発刊し、改めて「新しい死の文化」の構築を提唱しています。病院などの密室に閉じこめられた死を解放して、大人も子どももすべての人が、死を自然なものとして受け止め、自由に話し合えるような雰囲気をつくれれば、その中から、必ずお互いの命をもっと大切に考える、成熟した社会が生まれてくると言っています。

非現実的「死」を「避けることができる死」へ

デーケン氏は、『新版 死とどう向き合うか』の中で、死を教える時には、知識のレベル（死に関わる様々なテーマを学ぶ学問的研究で、死への準備教育の基礎）、価値観のレベル（自分の価値観の見直しと再評価、生死についてのより確固とした価値観を身につける）、感情のレベル（生死の問題についての自分の感情の認識）、技術のレベル（知識、価値観、感情のレベルのあとで行う技術の習得（スキル・トレーニング）の実施）という観点から考えられ、15の目標を掲げています。そうすることによって、事前に体験することのできない「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探索し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得することはできる」と述べています（224～227頁）。

しかしながら、突然の死に出あってしまった時、私たちにあって死はあまりにも非現実的な出来事だと感じてしまいます。事故死であったとしても、災害によるものであったとしても、また、事件にかかわるものであったとしても、その死は突然に日常を切り離してしまう出来事です。この不条理をどのように受け容れることができるのでしょうか。何の覚悟も何の準備もできないままの人生の終焉。あるいは絶望。それを事実として認めなければならない遺族。それゆえにこそ「死の事実」と「なぜ生きるのか」という意味を知る大切さが必要ということになります。

デーケン氏は、大学での講義で二つの演習を学生に課すといっています。「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」という小論文と「別れの手紙」を両親や友人、きょうだいなどに向けて書くというものです。書くという作業を通して、学生は自らの価値観を冷静に批判でき、過去を反省することや、周囲の人々とのつながりを考えて、そこにある愛情に気づき感じ、感謝の気持ちが生じるようだ（同書、227～234頁参照）といっています。そういった授業実践の成果を読むと、若い人々が生と死を真剣に学ぶことが、生きる意味を見出していく糸口になっているように思われます。「避けることができる死」があるという希望につながっていくようにも思われます。

非現実的の死は、昨今の“少年犯罪”によって代表されるものがあります。酒鬼薔薇事件（平成9年、少年は14歳）。報じられた事件の内容もその動機も「なぜ、そんなことが起こるのか」としかいいようがありません。多くの有識者の解説をいくら読んでも「なぜ、そんなことが起こるのか」「人はそのようなことを起こしうるのか」という思いは強く残ったままです。その

社会的背景として、インターネットと携帯電話の普及、ゲーム脳などが指摘されました。『「死」の教科書～なぜ人を殺してはいけないか～』（産経新聞大阪社会部、扶桑社、2007）は、その冒頭頁に、

新聞は、なにか事があると、「命の大切さ」を訴える。

校長先生も、なにか事があると、「命の大切さ」を訴える。の2行を掲げました。そして、「第1章 なぜ、人を殺してはいけないか」を、「“子供たち”の殺人 空回りする「命の大切さ」」で始めています。被害に遭ったいのちは、加害者にとって何だったのか。

「なぜ、人を殺してはいけないのですか？」

西鉄高速バス乗取り事件や愛知の主婦殺害事件など十代の凶行が相次いだ数年前、ある公開討論会で客席の若者が何げなく発した質問に会場は凍りついた。子供と正面から向き合おうと思っている大人ほど、その答えに窮した。（同書、14頁）

「夏休みに入る3日ほど前、うちの学校（中学校）で女子生徒7人が立て続けにカッターナイフでリストカットしました。今の子供は人の命ばかりか、自分の命も粗末に扱う。われわれ教師は、子供たちに最も大切なことを教えてこなかったのではないのでしょうか。……女性教諭の学校では急遽、学活の2時間を使って各担任から生徒に「命の大切さ」を話すよう呼びかけたが、複数の若い教諭からは、こんな声ももれたという。

「考えたことがないので話せない」

「マニュアルを用意してほしい」（同書、15～16頁）

この章では、人は死んでも「生き返る」と信じる小中学生の多さ、身近な人の死に直面していない子どもたち、地縁や血縁、家族の様態、そのコミュニケーションの変化、さらに薄れる宗教心や「生かされている」意識の欠如などが、いのちの尊厳を子どもや若者に伝わらない社会的背景として取り上げられています。

「一度死んだものが生き返ると平然と答え、残された人がどれほど悲しむかも想像できない世代が本当に増えているとすれば、その答えを探すのは難しい」（同書、21頁）とした上で、「死をタブー視したままでは、生の尊さは教えられない」「死を通して生を考える教育（デス・エデュケーション）を学校教育に」という中村博志東京純心女子大教授（小児科医）の意見を紹介し、二つの事例を掲載しています。

薄れる宗教心や「生かされている」意識の欠如は、教誨師を務める宗教者の体験から、最近の子どもたちに共通するものとして指摘されたものです。仏教僧でもある教誨師は、たとえば「お蔭様で」というあいさつの意味をきちんと教えたり、家庭で親が仏壇に手を合わせる姿を見せることで、子どもに生かされていることが伝わったり、生きていく意味について考えることにつながると言います。生と死について大人が子どもに向き合っていく。それが「避けることができる死」につながっていく。そう信じて、子どもの成長に合わせて生死を教えることが、いのちをつなげていこうとする大人の役割として必要です。